

魔法使い

×俺



俺と魔法使いは仲がよろしくない。

魔王打倒をめざし、旅をするパーティーは結束が固く、戦いで連携もとれている。

が、個性派ぞろいの仲間のなかで、魔法使いは断トツに扱いにくい。

極度の人ざらいで、いつも苦虫を噛み潰したような顔をし、への字の口をめつたに開くことなく、人が触れたら悲鳴をあげるし、近づかただけで、すさまじい拒否反応。

幼なじみの勇者以外には、だ。

勇者曰く、村にいたころ、人にひどい裏切りをされ、以降、ハリネズミのように威嚇しつばなし。

集団行動をするのには、かなり難のある性格だが、魔法の知識も技量も一流で、無尽蔵な魔力を保有しているとあって、パーティーに欠かせない一人。

必要最低限の会話をする以外、魔法使いに干渉しなければ、ノー問題だし。

はじめは、とまどっていた仲間は、勇者の助言もあって、今や適度な距離感を保ち、適切な対応をし、うまいことやっている。

ただ、俺だけは痛に障ることが多い。

というのも、魔法使いは俺に対してだけ、やたら辛口だから。

「勢いまかせに突っ走って、勇者に迷惑をかけるな、このめでたい脳筋が」

「自分の手柄が欲しいあまりに、勇者を押しつけてどうする、この筋肉だけの脳なし」

「女遊びをするのはいいが、勇者の顔に泥を塗るような真似をするな、この見かけ倒しの筋肉下劣野郎」

イタイところをついて、かならず筋肉質なのを茶化すような悪態をつくのが、なんとも忌々しい。

反論しようにも、凶星だし、俺はあまり口が回らないほうだし、つい、かっとなつて胸ぐらをつかもうとするものの、そのたびに勇者が「まあまあ」と仲介。

命の恩人である勇者に宥められては、引っこむしかなく。

それにしても勇者が「悪気はないから」と俺の肩をぽんぽんとすると、恨めしそうに睨みつけるのが謎。

唯一、心を開く相手、勇者が庇ってくれたのに、なにが不服というのか。

そう、俺には魔法使いに目の敵にされる心当たりが、まるでない。

ちなみに俺の性格は、魔法使いと対照的。

根っから人懐こく、積極的に輪のなかに跳びこみ、いつの間にか中心

に据えられているタイプ。

女性関係もにぎやかしく、勇者一行のガチムチ剣士となれば、途切れず女が寄ってくるから、ワンナイトラブし放題。

アレルギーのように人ぎらいな魔法使いは、きつと童貞だろうから、とつかえひつかえ女とエッチしている俺が羨ましいのか？

呻いてもがくうちに、ミノタウロスの体の前面にもたれて、魔法使いにむかって、足をぱっかーん。

男同士とはいえ、足を広げて、放尿したばかりのちんこをさらすのは、頬が赤らむ。

ちらりと魔法使いを見やれば、まぬけなさまだからか、目を細めて鼻を鳴らし「ふん」と。

羞恥心で体を熱くしつつ、蔑むように見られて「はあうん・・・！」と背中を震わせる。

「何回も何回もぼくの目のまえで射精して、空イキして、死にたいほどの屈辱を飲んで、墮落してメス化するがいい。

ちんこを啜えずには、生きられない体になればいい」

「せめて、怒る理由を教えて!？」と訴えたいなれど、ミノタウロスにおっぱいを両手で揉まれ「やあん!」とあられもなく鳴いてしまう。

女に乳首をいじられても屁でもなかつたはずが。

揉まれるだけで、あんあん勃起して、乳首を爪でいじられようものなら、先走りをとりとら。

「あ、ああ、うそ、なん、で、体、変・・・！あ、や、やあ、あん、ああん！あう、ずる、魔法、で、感度、ふ、く、ひああ！あ、ああ、だめ、そん、な、おっぱ、や、やあ、やめ、やあん・・・！」